

# I

## 悪玉にされた 特定外来生物の植物たち

外来生物が日本在来種の生態に多くの影響を与えていることは衆知の事実である。外来生物が増えると在来種を駆逐し、その生存すら脅かしているといわれている。そこで、国では「外来生物法」という法律で、他の在来種に対して特に悪い影響を与えている96種類を「特定外来生物」に指定し、積極的に、その駆除を進めている。植物で指定されているものは12種類。これらの特定外来生物に指定された植物は栽培、販売、譲渡などが原則禁止になっている。

現在、長野県内で確認されている特定外来生物の植物は、①オオキンケイギク、②オオハンゴンソウ、③オオカワヂシャ、④アレチウリ、そして最近新たに県内で確認された⑤オオフサモの5種である。残念ながら他の未確認種も、そう遠くない日に県内で確認されることだろう。



本来、外来生物のことは帰化生物といわれてきたが、法律では「帰化生物」という言葉は決して使用しない。「帰化植物」ではなく、「特定外来植物」である。帰化という言葉を使用すれば、日本での生育を認めただことになるからなのだろう。あくまでも日本に入れたくない、排除したいという強い考えが外来植物という言葉に込められているように思えてならない。

もつとも、私の尊敬する植物学者の牧野まきの富太郎とみたろうは、帰化植物という言葉は正しくないと主張したことがある。牧野は、どうしてそう考えたのだろう。

帰化人といえば、祖国を離れて日本に住み着き、日本人になったことを意味する。帰化植物は、日本に生育しても全ての仲間が日本に移り住み、生育しているわけではない。原産地にはあくまでも他の仲間の植物はそのまま生育し続けているわけである。だから、牧野は、帰化植物という名称は不適切であると考えたのである。さすが牧野である。納得。

最近、環境省は、「移入植物」という言葉に統一したようである。

# ① オオキンケイギク 〔キク科〕

特定外来生物に指定されている植物12種類のトップバッターはオオキンケイギクである。

今でこそ、特定外来生物に指定され、知っている人も増えてきたが、一般に知られるようになったのはそれほど昔ではない。長野市内のバイパスの中央分離帯に群生して咲いているオオキンケイギクのこと新聞等で紹介されたのも、20年ほど前のことだった。花が好きな私は、早速車を走らせ観察に行った。きれいな花だ、というのが偽らない第一印象だった。それ以来、年を追うごとに、この花を見かけることが多くなった。花好きの人が多い近所の家の庭でもこの花を見かけるようになった。

しかも、明らかに意図的に植えたことが分かる。花の美しさに魅せられてのことだろう。ある植物園では「5月の花」としてこの花を展示の主役にしたことさえある。花壇いっぱい咲いたオオキンケイギクの花は見事だった。また、いくつかの場所では、群生したこの花が満開になり、名勝として大勢の観光客を集めたこともある。もちろん、特定外来生物に指定される以前の話で

ある。

当時は、やがて、この花を駆除しなければならぬときが来るなんて誰も予想できなかったの  
だろう。というよりむしろ、厳しい環境条件にもよく耐える植物なので、ワイルドフラワーとし  
て多用されたほどである。

ワイルドフラワーというのは環境緑化植物のことで、テーマパーク、公園やスポーツ施設、レ  
ジャー施設、道路の中央分離帯、住宅造成地、土木構造物の法面のりめんなどの環境美化の目的で積極的  
に栽培される草花のことである。私が見た市内の中央分離帯に群生したオオキンケイギクも、厳  
しい環境条件でもよく耐える性質が買われて意図的に植えられたものだろう。

その頃はまだ帰化植物についてそれほどやかましく指摘する人もいなかったようにも思われる。  
この花は元々、園芸種として日本に入った種である。明治の中頃というから、かなり早い時期に  
入っていたことになる。

この2年間、私は勤めていた研究所の仲間と長野市内のオオキンケイギクの分布調査を実施し  
てきた。その結果、この種は市内のいろいろな場所に生育していることが分かった。

分布調査と併せ、長野県民の意識調査も実施した。オオキンケイギクが庭に植わっている家の  
人に聞いたら、この種が特定外来生物に指定されていることを知っている人は皆無だった。植物  
名さえ知らない人も多数おり、驚いた。知らずに意図的に栽培している家もかなりあった。

「栽培してはいけない種だなんて知らなかった」

「毒でもあるんですか？」

「きれいな花なので他の人から貰ってきて植えたものですよ。いけなかつたのですか？」

と、逆に質問されてしまった。

「きれいな花なので、亡くなった夫のため、毎日少しずつ手折って、仏壇に供えているんです」

という女性もいてシヨックを受けた。愛する亡き夫に捧げている花を駆除してほしいとは言えなかつた。

ここまで人々に親しまれているこの花を法律で駆除する

ように呼びかけるのは良いのだろうかと考え込んでしまった。この種が法律で特定外来生物に指定され、販売・栽培・譲渡が原則禁止されていることについて説明するのが辛かつた。

外来生物法には、罰則規定がある。第六章第三十三条には、「次の各号のいずれかに該当する者は、三年以下の懲役若しくは三百万円以下の罰金に処し、又はこれを併科する」とある。厳しい法律なのである。だから逆に、特定外来生物であることを知っている人がいなかつたことにほつとしたのも、偽らない気持ちである。



じつは、この美しい花をつけるオキケンケイギクには、もう一つ、悲しい話が残っている。

何と「特攻草」と呼ばれたことがある。太平洋戦争の末期、特攻隊が飛び立つことで有名な広島ちゅうけんの知覧飛行場周辺にも既に群生していた。最後の別れに来た隊員の恋人や家族が摘み取り、花束にして今生こんじょうの別れに手渡したのがこの花だったといわれている。離陸した飛行機から見えたオキケンケイギクの群生が、特攻隊員が祖国日本で見た最後の花だったのである。

亡き夫にこの花を捧げている年配の女性の話といい、この特攻隊員の話といい、身につまされる。

ところで、農家の方々にとっては、雑草との戦いは宿命のようなもの。しかし、家の庭に咲いている花を駆除しなければならぬなんてことは、麻薬になる大麻やケシなどを除くと、これまでの日本の歴史上、例がない。

長野市内のオキケンケイギクの分布調査は月に1回、繰り返し実施するので、同じ場所を何度も通ることがある。前の調査で駆除を依頼した家では、抜き取ってくれた家も何軒かあった。感謝すると同時に、申し訳ないという気持ちも湧いてきた。特定外来生物は国や県で指定したものだ、駆除しなければならぬということは、在来種の生存がそれだけ危ぶまれていることを意味している。駆除を徹底するには行政がもっと積極的に啓発していく必要があるだろう。

ともあれ、帰化植物についてどのように考えたらよいかを真剣に考えるきっかけになったこと

## 《観察ノート》

### オオキンケイギク〔キク科〕

北アメリカ原産の多年生草本。茎は束生し、背丈は30～70cm、根生葉は長い柄があり、3～5の小葉に分かれる。葉の両面に粗い毛がある。頭状花は直径が5～7cmで、舌状花はオレンジ色で花冠の先にはきざみがある。筒状花もオレンジ色で花床に細長い鱗片がある。果実は扁平で、暗褐色で光沢を欠き、半透明の薄いひれに取り巻かれている。開花は初夏だが、花期は長い。各家庭等で栽培されたものが飛び出し、広範囲に野生化している。河川敷や道路沿いなどに大群落をつくっている。

### ハルシャギク〔キク科〕

北アメリカ原産の一年生草本。茎は高さ60～120cm。葉は対生、1～2回羽状に深裂または全裂している。頭状花には長い柄があり直径3～4cm。舌状花は8個前後で、上半部がオレンジ色、下半部が紫褐色のものが多い。特定外来生物には指定されていないが、かなり広い範囲に野生化しているので、注目していきたい。属は異なるが、コスモスの別名は「オオハルシャギク」である。

### テンニンギク〔キク科〕

北アメリカ原産で観賞用に栽培されたものが逸出し、帰化した一年生草本。春から夏にかけて、長い花茎の先に直径5cmほどの頭状花をつける。『日本帰化植物写真図鑑』には「近畿地方以南に帰化」と記されているが、長野県内での帰化も確認された。

だけは確かである。

オオキンケイギクと同属の種にハルシヤギクがある。北アメリカ原産の一年生草本である。別名ジャノメギクというしており、中央の筒状花は暗赤色で、花毛はないが目立つきれいな花である。古くから知られた園芸植物で、広く市街地に逸出し野生化している。場所によってはオオキンケイギクをしのぐ勢いである。キク科の仲間はどれもたくましい。ハルシヤギクもやがて特定外来生物に指定されるのではないか。そんな予想を感じさせる種の一つである。

帰化植物の世界もどんどん変化しつつあるように思われる。